

# 〔連載〕 武州御嶽神社宝物シリーズ9 滝本川の神橋の擬宝珠

日本風俗史学会委員 齋藤慎一  
青梅市文化財保護審議会委員

武蔵御嶽神社への参詣路が 往古、人々の潔斎した地で、「北の神(御)坂」へいよいよ また山上の祭祀に当っては、掛かるうとする所で、神域と 参籠し禊をしたと伝える。俗界を結界するように一条の この川に懸る橋が「神橋」清冽な流れが道を横切る。こ で、かつてこの橋の欄干につ の川は滝本川であるが、 けられていた青銅製の擬宝珠「御萩滝」「御萩川」と呼ばれ、は、現在、宝物殿に収納され



神橋の擬宝珠  
右は全形  
上は部分  
下は銘文の拓本



ている。 擬宝珠は破損するものもあるが、六個で揃い、いずれも、洞の上の節と中の節の間に、「御嶽山身萩瀧 神橋 多摩郡西分村 願主 坂上林蔵 慶應元(丑)年 六月 江戸 西村和泉守作 御師 橋本玄蕃」と刻銘する。高さは、ほぼ36.8cm、下方の外径14.8cm、内径13.5cm。慶應元(一八六五)年、江戸末期の製作である。当代の典型として、全体に縦長の傾向を示し、宝珠部分は径13.3cm・丈は11.0cm、欠首部分の丈6.5cm、伏鉢部分の丈は2.8cm、胴の丈は16.2cmである。下縁の節の外径14.8cmであるから、この擬宝珠をつけた柱の太さは20cm近いものであったろう。「日本橋より此処まで拾六里半」(「御嶽山一石山紀行」というが、この間に江戸日本橋と四谷見附の橋以外には、御嶽山に到る青梅街道には擬宝珠を飾った本格的な橋はない。

と推定できるから、前年六月に竣工したこの神橋を描いたものと知れる。 擬宝珠を製作したのは江戸神田鍛冶町の西村和泉守で、元禄頃の神田鍛冶町の鋳物師和泉守時重(「江戸惣鹿子名所大全」の子孫であろう。御嶽山下の柚木村の愛宕山では、元治元(一八六四)年十一月に西村に銅鐘を注文している。「愛宕山釣鐘諸懸り勘定帳」には「一金百五拾両也 江戸神田鍛冶町 西村和泉 御鐘一口代金 但し本白味 差渡式尺壹寸 疣百八ツ 目方九拾貫目」とある。青梅周辺には西村和泉の製作品が多いが、擬宝珠は珍しい。 さらに寄進者は、御嶽講の定宿として「御嶽菅笠」が大きく見開きで、店先の景を描く西分村青梅入口の坂上屋宇津木林蔵である。その挿絵の坂上屋の場面には「御嶽山代々講中」の旗を持った代参講の

描かれる。同じく大柳の渡しは長六十間・幅七尺だが、仮橋であった。日向和田の万年橋、沢井の御嶽橋(高橋)の構造は大規模であるが、無論擬宝珠の欄干ではない。従って、御嶽の神坂入口の「神橋」は青梅街道經由の御嶽参詣道中で唯一の擬宝珠の橋ということになる。柱六本は擬宝珠で飾られ、架木・斗束・平桁・榑束・地覆と本格的な欄干で、神前にふさわしい意匠の橋である。

文政四(一八二二)年頃、御嶽山に参詣した江戸の独笑庵竹村立義の紀行「御嶽山一石山紀行」は「(御師尾高家ヲ出発シテ) 壱町程ゆけば橋あり。長さ式間余、幅五尺斗あり。滝本川と云。橋の向ふの方に滝あり。白藤双珠の樹の間、石の龍頭より仕出す。高さ一丈斗り。水勢はげしく散乱す。」と、その橋の規模と神域らしい景観を述べるが、

置から慶應二(一八六六)年 講中」の旗を持った代参講の 本稿は、一九九八年度青梅市郷土博物館特別展示「青梅宿」に、この擬宝珠が出陳されるに際して同年二月八日、伊藤博司、木下裕雄、北村和寛氏と共に行った調査記録による写真が青梅市郷土博物館の提供である。